

いいとこ取り

東 裕子

鹿児島大学医学部皮膚科学教室准教授

仕事は順調、家庭円満、どちらも上手くいっているそんな人生を歩みたい。“どちらか？”ではなく、“どちらも！”がいいに決まっている。

20年以上、皮膚科医として働いてきた。ずっと仕事を続けてきてよかったと思う。途中、2回ほど辞めようとしたし、すべてを放り投げたくなることもしょっちゅうあるけれど、こんな楽しい状態はいつまで続くのだろうといつかは来る終わりの日を考えると、いまはこの忙しい時間が貴重でいとおしい。

皮膚科医になりたてのころは、専門医をとって、次は学位……と、皮膚科医としての道を少しずつ登っていくことを予想していた。でも、そういうものではなくて、扉が開いて別な空間へ入っていく感じだ。おもしろいことがいろいろとやってくる。先輩の指導を仰ぎながら診療するところから、自分で治療方針を決めていく段階になると、責任は重くなるが、おもしろさ、充実感は増していく。診療だけではなく、研究や海外出張、学生教育、他大学の先生とのやりとり、キャリア支援、患者会や市民公開講座といった社会的活動など、なりたてのころには想像できなかった仕事が広がっている。

子どもを産んでから大きく変わったことは、時間に対する考え方かもしれない。限られた時間の中で何を優先するかが大事で、時間を作り出すために、他人を頼る、もしくはお金を使えばよいと思うようになった。できるだけ長く子どもと接するために、平日の夕飯作りは諦めて、近くに住む母親に頼んだ。初めのうちは自分でやっていたが、料理嫌いの私にとっては、夕食のメニューを考えることから苦痛で、甘えてくっついてくる子どものせいで、調理もはかどらないとなるとイライラが増し、せっかくの子どもとの大事な時間もつまらないことになってしまう。“やらない”ことを決めるのは、効果的で、時間だけ



でなく気持ちにも余裕が出た。のんびり過ごし、子どもと一緒にとっとと寝ていた。そして必要ならば、明け方起きて仕事をする方式に切り替えた。職場が近いので、早朝暗い中いったん仕事に行って、6時に帰宅、朝食を家族ととったあと8時過ぎに通勤し直すということも。のんびり考えている時間はないので、なんでも即決、完成度が低くてもよしとする。子どもが小さいときには、よくおこる不測の事態に備え、期限のある仕事は早め早めにやっていた。残念ながら、この癖は性に合わなくて、すっかり元の締め切りに追われるぎりぎり生活に戻っているけれども。

生意気盛りの娘からの一言。

「ばあちゃんにご飯作ってるし、そうじはルンバで、洗濯もたたむだけだよね。母親として何しているのか探さないといけないレベルだよ。仕事してくれてありがとうぐらいかな。」

てへペロッ、そのとおり。私にとっては、最上級の褒め言葉。家族へ感謝。